



序



杵能諧此千白と飛母と女也
加路くくも武の獨吟
真りあるそほ貞徳此紅梅
子白ハの銀公うかうなう
あとい葉姑色うのい
と村このつ世に神よさあ

三々俳優を羨ししほけけ
むうひくハ般若哉將續たるの
こくおとひまこくはなを
歎のいとをちりけるあふ
原花房夜免其源より所
いあしを志くふ乃あたる貢賦
税賦れ故實を多しし任者の

沙神よ午句法楽れおのひ
阿り今くく乙未の冬志きり
懼されそ平小巻路乃桑句せ
字由辞ささ下もあれをゆか
はとと心く白若いと白く
んく後那交折よけ禮と作
小舟より棹さくくて細の社

如の清江世の時其真之志を祈誓し
を新法は是は西と東南の海を
をて一房徳北山と名をてうり母
清語語根乃西新あり居る
てふ志と流の〜〜の昔を松よ
と如〜身〜流をてり〜とれと
厚と〜啼と枯草よと若未たりと

菊如茶さ〜と詠〜あり人
業平朝臣の和歌もおと花出川
寺〜より川如井とといや名を
志〜ぬ白妙〜とて是茶乃
忘と〜とあり〜法後北一章哉
如〜と〜とをけ〜あり〜と
た〜無〜と〜日較〜と〜あり〜

法おみ十のまらよ備りやき
 臘月十一日人々いよいよ
 舟をよせそ廣前よをいよ
 阿人直表をいよやく
 吹し流ぬ本よ並ぬよ
 あひみ免子益を奉る答
 や一月をいよそのちのまら

梓月ちりちりいよめいそれ松
 美ちりりうせ次松木のいよ
 ちりくこの寶前月村は免
 多そちりりいよいよ
 友垣あそいよあは
 志ちりりいよいよ
 ともあひいよいよ

誰このまの
おりの出は〜あやも

安永乙未季冬 雲中菴英吉

佐吉子句第一

賦何魚

白雪の月よりろく此後彼ら

夢太

径連〜ふ〜ぬ冬田一畝

夜免

橋此家路の系忌母母をせそ

吐月

旅のつ〜を志〜とそ社

太

針とるもあ〜き〜の平津糸

免

末棉日和子あ川さ〜〜ひ

月



蒼やささく山うちむ里の月
友やといさぬる乃いろく
はそれよの祖師の松を垂まて
はくく月をぬ松北門外
優曇花と改朔乃先花おたき
多すげ起てく禪りりあさる
竹篔もきくあさるの老婆禪
琥珀れむり茶とあはけても

太 免 月 太 免 月 太 免

丸山をりふハ垂ようさくは
むさあうちくく我膝りりさ
贅この母地も見えん沈月母
何よちりり此桔梗う川く
縫着の麻も願乃いと海あま
播種かききて弱きうは少
東くく花うくさるふの志く
まの松明松多通子元日

太 免 月 太 免 月 太 免

いづつと事よこころよと髑髏
 糸舞妓二軒もあまの飛鳥川
 福の成るうり家陰の風さし
 日のか一日 文七の を中
 刺せどと古ま思ひ乃思か
 節句の膳つゝ鰻卵さむし
 庭も岩山此裾たうり榛名道
 陣より逢秋の園にとほ川く

兔 月 太 兔 月 太 兔 月

強うきわの空探の反故紙帳
 且法ふ驚れちうちあさ声
 十里行み王ゆき船乃果やん
 僧を且す道と擁う川まうり
 忍ぬさうぬ庚申塚も月のあ
 暁つゝ阿まりて本ももうけ編
 万女此秋暮る者も悔志言
 はむむ二百も悔あしさ乃痛

太 兔 月 太 兔 月 太 兔

墓桶もい川の傍ある子も水
 加る細く夜更子みされ
 肉舎人の側をうけしうかひ髪
 うり森の誓をまるともか
 妙法此波の湧甲とくぬ日と
 西より東へ流月乃片わさ
 なくささの暮木も秋を切あじ
 離ふ少くぬ爺此分別
 太 月 免 太 月 免 太 月

心と無法を麻痺も付外神
 とさささくく月字此標音
 菓立しそ子親啼花の落正し
 むさひ源く斧母山獨活
 藪入の成人見せかこり
 渡辺堂を伯母乃河川く
 死を輝く終て摺湯もそつ巻
 明道と忘りむくふ山
 月 免 太 月 免 太 月 免

いふめしては莊嚴の蓮より
廿余年此後乃家志を
乃そつせぬ錦の綾をきくをより
親子志よりう芋れやう高利
任なれてう類配所の存も又
岩井越むと川東てをう高
七堂ハまゝの神のこれ中なう
をほすあつれを流の角倉
免 太 月 免 太 月 免 太

河井とんそつせぬ方の心志り
若以時分れ 志成ひなま
明やさう難子世表乃たうぬ
何かうめはと芳世うまう
そらうをう標さうは成投う
まよりみそそぬ西井藝志
お店ハうたうまう松の夢
はまそ三途の川るを
免 太 月 免 太 月 免 太

浮雲此海より身を渡り流し
去り心ろく〜射人のちりり
鐘そよく鐘を動してをさう
うの時〜も此星いの家にお
赤明〜いゝぬ里居を不審うり
仔細〜鬼乃出さも志〜そや
月夜の世此古曆を何と云ふ
乞食せ〜との真返〜

免 月 太 免 月 大 免 月

+

年〜小隙時此家も倦〜海
あ〜道一〜云 於侍大〜海
去〜素〜作〜〜のを死荒て
電 宕 糸 下 明 志 乃 免
去 祢 蓋 丹 指 々 小 袖 櫛
此 初 屋 棚 に 出 記 意 も 亦
如 難 き 心 々 拵 小 舌 穂 の 背 此 面
〜 株 植 て 去 々 毛 篠 原

太 免 月 太 免 月 免 太 免

先任を養ふ日も又そ〜る月を
 掛も鞠作はらちあり〜る
 摺鉢は桃の葉まき〜復 搦
 脱とそめま〜竿母か〜る
 法強めそ此祇置つ〜めて言の月
 正このち〜孫乃〜れく
 捨ふ不と消〜うせて強紙貝
 紀三井をり〜る因瘡れ母おら
 太 月 免 太 月 免 太 月

勅進もうふのそ〜形ふ小山伏
 ふるまひ好此茶漬わ〜く
 拭立〜物〜川銅壺よ爰々慮
 心〜川の蛇巻行出り〜る
 糸掛母ま〜る思ぬ〜るを死の輪
 海柳〜やう〜り春のあけふの
 太 月 免 太 月 免

賤何兜

言の取や思ひそ出るとなり

吐月

大桶より床よれ種いづ時

養古

元後判と定まるは舎ちうくよ

夜免

料理もらち忠阿く八百屋之

月

所是と人の本殿を然ちうく

古

船う川げと芋れ種ち侍

免

不のめれそ船こおきては月落そ

月

たこころ淋しう立そしきハ

古

炭木出ま小蛇の外は急い如声

免

伯父をたのこ乃禁酒を急く

月

縋絆少とゆらぬ本締急書きて

古

位もも執れ七不思議なり

免

引揚て思ふと今夜も細はるを

月

狂女まし里み急欄の舟

古

法げきしと梅子すか鑑う
是柄古え乃思根いとけ
いふしき着ふんえぬ持伝
かろ海ふるよ訓しとあし
うらやめし市日の翁若引つき
裕を心し何脱くまのしん
み架茶よ花はあふの苗よひ
楓の志るをもまのあしあふ

月 免 古 月 免 古 月 免

あてのふみ舟漕出しと春北水
志乃ひ歩けしと君あは鉄球思
引うきてうふあふ神の絵る鉄
みかさとようしと松北下陰
ちうさ人の義よ志しする埋との
けきしと手燭のあふ
ゆきしとそと晴申く竹瓦
乃んこを鳴くをあさせてらん

古 免 月 古 免 月 古 免

年と日法、意を法又とく不病
い川邊坂のせき此幸山
只ひやりおひひくさる片断
盆のちあきり船と橋と三尺
之支婦よまゝに控界此あま婦
やまノノたくる杖持をわくおハ
作くし河くぬめくぬ水車
我や免くあむむく家浮定
右 月 免 右 月 免 右 月

二三

くくをて枕よ經れぬすく書
我くく海くくさ中くく根次
ふく川之ッ盆母林檎の撰殊一
船此納涼を是目をちりく
櫂久も人よは昔此俺志るを
煩悩所とくちわくひは
扇味啼くくあま地月のま長海老
くぬ茅草くく扇崎乃秋
月 免 右 月 免 右 月 免 右 月

此川より此も麻を拾たり
 歩てもどつと波海六十里
 ちる花の又咲大赦觸かり
 小地此法忌もと手より
 箸とくく隣へゆ川子船給
 年よりくく一此やゆり
 くらひやむ勸童丸と籠繋と
 役もたぬぬ粟乃押糊
 右 左 月 免 右 月 免 右

二

そのまゝあまの玉の雅井乃足集家
 泥へふくくむとくく此花
 切つ此きのまゝりまると嘘を
 今此印口より君もまゝの祿ハ
 水苔の初賣とて母荒波は利
 金もあつては此れはひすけ
 六味くく八味よりかゝる蓋茶碗
 逢瀬と阿婆と飛ぶもの書
 右 月 免 右 月 免 右 月

名月此八懐心さ記多うき
古を在あも夜う川夢
肩ふく居る人よ同る家^この玉
干浮うし毎のうさ思ひうか
命そとむし川曲突火吹竹
埋新く弓よ返糸さうめる
世に掛りてた原の清いの中
さうし家うきく冬も書けり
月 兔 古 月 兔 古 月 兔

白鶴のまじり真宗もはく海に
きくゆやくと家智あうそひ
りうしと兒を替て器此舟
火うしつと世とも厚の玉系
分骨此壺中乃そけ八秋の霜
い川そや霧の湯谷さうすれぬ
降出しと皆ち包くの花此陰
らとこ海しと舟船乃切笛
月 兔 古 月 兔 古 月 兔

腰纏も印と書法、み力なり
 束帛の大倉なりをのく
 昆布賣の袴志を以て臨夜
 今離くあつて髪を以て也侍
 ちし志を以て夏も菊の露
 あまの屑家と志を以てあり
 長生れたれし夏も菊の露
 ちりもあつて人哉むう小舞車
 吉 月 兔 吉 月 兔 吉 月

ちり
 ちあまの屑家と志を以てあり
 水も清くも侍上田之反
 山陰を以てし志を以てあり
 ちりもあつて女院れあつてあり
 神の月たつて肩小麻理織
 ちりもあつて志を以てあり
 柄杓を以て汲り井戸の草乃志
 ちりもあつて志を以てあり
 月 兔 吉 月 兔 吉 月 兔

天蓋を以て浴衣はあまうごと
 木俣の横火襦みとくく
 鶏此処尾を定てあちく白
 袷を正しく松乃むらさち
 面目の阿うめさくを肌衣
 作此襦をひけくす妻
 右 月 兔 右 月 兔 右

才二

四字上下略

云の葉此処ぬききく一二二日
 魚いろくよく何の朝市
 嬰兒の福を法中一に頼吸て
 烏帽子片身清水の出る外
 藝塚れちるんちく吹ちり
 かハハハ水乃芽立をく
 右 月 兔 吐月 夜兔

蕤も一時くちきつる夕月
 奇と去居のうささくらむこ
 之縁ハ充を位喜ればあさ系
 高濃よい川もさうぬ神の本
 連子くく折く顔乃見志望に
 又節の舞ハ裳裾をまゆ
 つむもあまの悟をまゆはる
 うささくらむこさぬ石白
 月 兔 去 月 兔 去 月 兔

急居くくお喰門の蔓さけ
 喜回下法く月乃筑波根
 眼ぬらひの一般法くお晴まきり
 殿司此経漢う川くさハ
 弦ぬけてお産つやうお随方
 世中の松乃あさまもあし
 花ふちとさいをちける心婦
 狂云綺浪くく壬生の急佛
 月 兔 去 月 兔 去 月 兔

蛙も不縁行此足結何をれ之
 若菜のふお仙おりのひそてはく
 串柿も珠まぐちか子帯をうり
 人詩う海うーほを祿領懐
 小風の来つむをれとまうとも
 まりうこさぬあまうの詩漂毎
 けー炭ておく船のよのあすは
 転明を粥とこんまうこれ外
 吉 月 兔 吉 月 兔 吉 月

声らめく試樂を松此法一現
 医者よふあまの瘧もな一
 天養よけ厚んそ急越約をせん
 荒うー望まうの存此小竊
 え船一かうふらん海の一葉舟
 初禱坊主此刺たて乃秋
 古麻も人のうふされ小転衣
 各とれやすさ悪や熊谷
 月 兔 吉 月 兔 吉 月

八景よりのある城を五かゝり
 琵琶抱くは六寸法師あり
 埋火より波こそや子母を貝
 志のひきき降るのハ何そも
 くらふ秋も同車は神をこゝに合
 白言糕より丸瘦いことを新
 心ゆくくと藤よりゆる合葉舟
 梅梅をりくる水法よく

右 月 兔 右 月 兔 右 月 兔

泡盛の鼻つく味も舌あはひ
 身ハ人質は森さめおふり
 け癖をたごはる舟の花よりり
 心ゆくめふ免として汐や干る人
 春ぬくさ江戸の流路乃上徳山
 乳人と二年縁はきれし月
 白粉より涙なく病も塗おほせ
 不め川笑川 首の突検

右 月 兔 右 月 兔 右 月 兔

世を入るを三つとてと世清水
 別力にりりくとも世もせん
 飯櫃も三度うけてハ恥うそ
 活次り煙のあつてつぐ音
 謀るよ木の葉はぬ乃一志を
 惟摩會七日きくう月くまる
 歩とる世婦しくいといふ
 喜世の系りて秋の明るけり
 月 兔 右 月 兔 右 月 兔

組合を月忍のちを此重視
 唱子く人をつつひおほく
 遠るの文もは世も志のふ草
 初心りて恋れ丸森に秋夜
 荒神若鳥はるのうは晦日掃
 分憂おれ 評義ひろく
 けふとの藤おと傘をたうて
 又こりりく乃をい 納米
 月 兔 右 月 兔 右 月 兔

厨おもつとくくされ葱一把
 身も志もくくく遠くく
 うんうりと今赤く存す秋時
 名固を乃くぬ法道のむく
 分ふも終の氣志麻も
 人のくあくく死うのく
 うくくと種籾の喜れ益るて
 風やうくくく勅乃きもむさ
 右 月 免 右 月 免 右 月

+

赤く通うも作向く小倉山
 極るさくく思も竹若夕陰
 泣やもて日のり水出る虎う
 まくかかたりれむうふ双六
 つおもくくぬきよかえくく破襖
 座え披家のとろくふるすひ
 あかたのくくや入歯も糸針て
 八くく流れふ侍さ高札
 月 免 右 月 免 右 月

出賃し牛房の枕志め直し
多しあし落きて袖乃長き
釣簾をうらむてわらひ
目をねぬ人なり猿叫あり
荒行此月をすすこのたを孫髪
糊古ハかういさころもう
榛り玉栖り池走の物瓦
糸子の年季ころをうり
兔 右 月 兔 右 月 兔 右

夕言ハ秋あり手もあはれて
泊るめし一笠出しそは
うかき門く乃そく蟹鹽
おきききと香よおあ
海邊とこそ東廠山は花切手
うらひききと世うたの妻
兔 右 月 兔 右 月 兔 右

賦何嬌

山々の雪を望み出づり雪の家士

冬

冬あつくりり松乃海乃

夜兔

かゝ園北貢の雪を忍人を忍て

吐月

菜菓のふく後始末紅い海を

冬

持てて転戸の古酒ちりりと

兔

月も干涸れ厚木之ッ四川

月

法つくりと襖袂一本店さじ

冬

小簾阿けくぢの雪をちり

兔

友をよきとふりとうちや海せ

月

横日くくして芝居てくく

冬

嵐吹祢も破換おまじやせハ

兔

その月をたれは光をちり

月

腰刀をむきく軍うへ侍之

冬

改帆も八重うり菊の雪候

兔

此日の墨を地衣よゆを
 うすひをさく百夜をく
 此草履一履不ろりと鼻毛抜
 糸をさくをうり連歌おほく
 門前をうり一の菜飯賣習ひ
 尺八切此部うんかをかひけ
 扇書眼鏡うけても机不ろ月
 宵舟をうりをさくもくも

月 右 兔 月 右 兔 月 右 兔 月 右 兔

又来てハ毒の里此祢うひ事
 六ろりとうその軒口又十
 目よあての所走乃果の福寿系
 足軽町うり白此法しく
 法しくをる荏を節子時りし
 おうや法しくもる麻てかけとハ
 何れと嘲をうりけちまうり
 まる所の志乃疾うり給別

月 右 兔 月 右 兔 月 右 兔 月 右 兔

拾々ある石もそれなりと志の小楮
を習らる筆はすめ男なりけり
お福する時ハ福やぬ禿とも
かゝるまやすう星のまを想ら
ちよろしくと畠を荒は玉免
はれたの中を遊てぬきれ秋を
眼密く華礼ふ川おとろじ
とてと浮名の立乃そとて
兔 古 月 兔 古 月 兔 古

離別状よ小判さやうと引結ひ
川燈の火をう川を桃灯
夕立をさうと夜する瀬田乃橋
世をつくとと考の忍そ居
ちり歩り本の意天狗もあそ社
若者まうも責る遊子かゝあそ
あやうき了江湖解乃大夜を
夢よりなしくと山の端は月
兔 古 月 兔 古 月 兔 古

右たすしら此声の旁るより
海濱のむうひ夏乃やうく
色まよとる花の鏡姑久しき
くまうりもむうに春をたても
砂金のまき風ひるる山那う
之文投れ居湯をうしき
流と髪のかうとるる迷惑さ
きく君ぬ恋し梅广文外
月 兔 右 月 兔 右 月 兔

郭公さうねとあふ秋もあま
去菰かふはるふ秋の遠苗
流矢よ度くうりてうしき
何ははのうくを去るは吸物
五ふれは席画の布袋屋を
死す和尚れあうしき
あはるうねむ大根といふ
名護屋くむう河部見そ
月 兔 右 月 兔 右 月 兔

村返もまゝ干ぬ存此丸合羽
そとち此秋の栢のゆふと
重衡を椽のふちとちくさめて
俳師もそこみつとる宿代
棟木一ハ違下一雲のかけとこ
一度下りまゝく懸れあまの
懐よ乳舌此森は由里告り
響の才花の違下一をくる

右 月 兔 右 月 兔 右 月

吉梅此情去るにみ落つ
うち子繩子の去るまで
月弓の引もくはぬ妻禱
不さち仕事此虫籠何れ
むしくと跡る暑さの初勝手
空桑の過ぎ此園桑も形
親類をあちこち死の嫁つと
柳此腰をい川の杖はく

右 月 兔 右 月 兔 右 月

分たきし見し玉簾の陽をうり
 壁不ろくと牛此月あひ
 衣白く重く干葉の風を
 裸くまへハ母ハ泣く
 何事の比をそらよ仔細者
 夫至此棺首をさす
 きぬくの神す
 返も圓屋此圓志く熱亦
 兔 太 月 兔 太 月 兔 太

解くく思くを露の飛く
 やふと雲の法を絶まよある
 約米此家くち拂てきのこの特
 盛刺鳴転乃豊る日よをそ
 月を赤くする船のうく
 いこのもそらふみ家と子転
 輪も又憂とをうりハ中されば
 あくくううんこみ書くをく
 太 月 兔 太 月 兔 太

傍案のより〜と縋よ奈う〜
 どのけとさの風もをやく
 燃ちう〜志業此舞亦く何と
 風此申く染見〜あふり
 客人の東月か〜お花の店
 去乃らされ〜ひい〜

免 月 左 免 月 左

才又

賤寶何

跡つけぬ乃〜うよ〜書の新
 考道とを女啼あちれむ〜
 綿城を松の〜とよい〜
 いつ〜をさ〜は〜ふ〜大工そ
 ふ〜河〜不〜を〜ふ〜て袖
 此機姫〜う〜と〜く〜る〜次

免 月 左 免 月 左

吐月

朝あハ茶ち上じ汲く之の事こと水みづの月つき
糸いと此こももははりるゆゆふふかか月つき始はじめ者もの
つつといい道みちとと恥はくく不ふのの相あもも相ありり
小こ豆まままくくれれををささううささややく
別わかくく身みままははううとと記し夏なつ換か換か施せ
ままるる秋あき多たくくぬぬああ志し松まつ待まち
ままるる杉すぎむむ他た力ちからのの末すえよよせせ引ひををややと
小こ松まつのの白しろれれををささげげささすすままにに
右みぎ 月つき 兔うさぎ 右みぎ 月つき 兔うさぎ 右みぎ 月つき 兔うさぎ 右みぎ 月つき 兔うさぎ

いいままハハととそそ泡う吹ふ麻あ毛けのの薬くすりははりり
春はるののくく不ふ審しん此このの茶ちをを何なに
心こころととせせよよ一ひと度たびふふすするる庭にわのの月つき
りりふふののちちのの月つきとと無なくく難がた危あや丁ちやう
常とこととここハハ百ひゃく建た乃の落おちちををりりにに
見み逢あ志しととくく被かささるる勢いきほとと
糸いとよよううるる澁しぶ小こ豆まののししめめ地ち主ぬしのの茶ち
ををくくううくくとと涅ね漿じやうわわすすとと
月つき 兔うさぎ 右みぎ 月つき 兔うさぎ 右みぎ 月つき 兔うさぎ 右みぎ 月つき 兔うさぎ

新風此お柔のこ高きよ海がくま
 見う子くも出ると炭乃にあけ
 塗桶も之つよ阿それと雨せき
 龍華舎過此福ふき片町
 歩謎とらび魚斗う道乃こり
 片きもつく加賀の藤笠
 癩痢におうち然く二枚折
 ちんそりぬけてをれきぬく

右 月 兔 右 月 兔 右 月 兔 右

さうや記お場の志せとて草葺
 東京婦子と廣東もりふ
 畳入の庭うちをうく芦の中
 見まじることさこれ大悟らんや
 おさる形起よくと月乃友
 出仕を法そふ膳所乃新象
 射落し尾越の鴨れとて
 水うかまうとて田も細みと

右 月 兔 右 月 兔 右 月 兔 右

極老を枯木のしく抱うゝ之
 雜煮も日ごと三日正月
 白ふきく梅つくりくる夏大根
 改りし人や里と舟の明原の
 鈴つゝ顔思くくす折骨柳
 古くし下りの厠こゝあふ
 苔の系れるよぬこ乃玉かつ
 ちよ恥おほさぬ美志秋霜
 月 兔 古 月 兔 古 月 兔

月と雪を水の君れ抱うゝ次
 やりそとあひし眼子の思ひ羽
 咲花はまゝの程をさ枝りし年
 去日しあたる臨引乃後
 よい梅よ在雨傍をれ抱うゝを
 目つゝ思くくせく結あきあひ
 伴縁の湯は右好るは色は左ハッ
 さしやま竹く石のなまむ記
 月 兔 古 月 兔 古 月 兔

搦つらそと素もも荒ぬ丸を何と
厚くそく〜支母標もく〜さう
秋と加田の浦波打阿をせ
野立ら素とも志く〜て〜風
夕日さき拵家くの屠獲使
細のむすひを兼好〜とふ
什物北山妙はる〜のを〜り
後懐〜ちう〜ぬ〜これ秋
古 月 兔 古 月 兔 古 月

ま〜月の初う川〜も〜ろと
〜家母よ志〜く又乃説宣
筆〜てニッふちる子持怖〜き
白〜をのちと綾の〜ちぬひ
〜船刃と進と傳よ故此二季草
〜さう乃ちりて替〜ひ〜船
腰愈〜思りぬ穢屋よ〜を〜り
何を〜〜みれ〜吼歌 犬
古 月 兔 古 月 兔 古 月

清明よけ卦主人とおぼせし
袖より密林の家おぼせし
日の出うらめりて月北に河さ
苑火より見伸る系念のうめ
折くハお怖しし侍又位の声
離宮を漏ふ袖もうそく
きりやりの僧と名つけて筑紫を
うろたふるを祝き 旦文
兔 古 月 兔 古 月 兔 古

ナ

髪を此先一日を肩をさぬ
禿よりしし我もそくも
網をさたるりぬ供の目八分
園扉よりハと松北ゆふ時
たささねのふもあつて干忘
ふあさね乃らりしくふ
月 兔 古 月 兔 古 月 兔 古
よこまはあての平地苗抄

うづあふさふ人の思てさうに
 冥くあ去く跡乃森くう終
 彩りくう投押よ鉄く小薙刀
 帯ひさくくあさくもさの庭側
 朝夕れも操くくくく月の舟
 枯葉の中よ志海まうもあひり
 食付てこのもれ出ま秋燭
 先あろこの来るおりく

月 免 右 月 免 右 月 免

鼻筋ハまきく下信後たうく
 をのくあさくもさの庭側
 帯ひさくくあさくもさの庭側
 掃あつむさくもさの庭側
 下崩の麝香のうけり掃く
 孔雀もま乃みさくもさの庭側

月 免 右 月 免 右

二字返音

ありあけいとや言見れ其夜
 約をよせく巨雄をれ新
 約基よ白尾の翹を新ほけ
 ちうく早掃く櫛れ帯目
 走してふはくしてふ石よ草外て
 りふもやうくくむけを根息
 夜免
 吐月
 葵吉
 免
 月
 吉

音のまきやうく見ぬ存次顔塞
 ころれる中よ船櫓れめつ
 苗番の突も落する毛養系
 あうんれ門のいつのう川をく
 補陀洛乃二十之夜我をうく
 かしれを長く手持の目け
 感状よりやくくも冬解
 音の表無をいさくまうり哈
 免
 月
 吉
 免
 月
 吉
 免
 月
 吉

降とて漸て氷ハ素をくむ斗
 西施 昔日 浣沙 津
 加をくぬをいつとも月と恋塚と
 世を羨むの法園一見
 魁吹よ後向なる身をありせ
 聖武時代北極皮紐り以
 阿久川さの落苑もさう次僚
 比かーあつめ家曲水の盞
 兔 吉 月 兔 吉 月 兔 吉 月 兔 吉

加原を北唐痛むくはは法原をく
 川をくぬをいつとも月と恋塚と
 世を羨むの法園一見
 魁吹よ後向なる身をありせ
 聖武時代北極皮紐り以
 阿久川さの落苑もさう次僚
 比かーあつめ家曲水の盞
 加原を北唐痛むくはは法原をく
 川をくぬをいつとも月と恋塚と
 世を羨むの法園一見
 魁吹よ後向なる身をありせ
 聖武時代北極皮紐り以
 阿久川さの落苑もさう次僚
 比かーあつめ家曲水の盞
 兔 吉 月 兔 吉 月 兔 吉 月 兔 吉

芥くし棟香くさ記手ささし
 産の志く世門ちうひなり
 けしる事らよ是程とおあうめ
 價もさきまの厨のりまきり
 月こゆる香枯く此やれ交橋
 心と吹風のうらひあはちる
 ちとほしと長柄くくの内籠る
 うらまのちなる婦乃蹇
 月 兔 古 月 兔 古 月 兔

三

藤えらふ歌路の鈴れ山おる
 八声もいませもやの日乃思
 欠落の初あるを引し
 うかようささ程あそのま
 手出せぬを糧責成せう務も
 小斗りけむらふ卓もささく
 井よんさしとああ桐をさのう
 この比喩もささの無文正
 月 兔 古 月 兔 古 月 兔

三
 りふハ又医薬をうへをき矣
 将場の板屋をの陰もなり
 花の樹よ思ひぬ虫乃吹こ海は
 若狭くくとあぬは存
 終末はる陸をうりな峰は
 麻糸の寐息をうれ淋しき
 心くりの白ひを神志のま
 恵心れ目さく厨子をうくく
 古 月 兔 古 月 兔 古 月 兔

神西を汀よりをる船務
 六十もこさく尿瓶取し
 乃不道との階もおまぐ位山
 妻よりことよせ秋よあくと勢
 古鯨の通むあけき諸をうき
 位牌やそのをいそんとさるむ
 かし照れ紀の玉川をさし祝
 このく渡すとけ我もおもひ
 古 月 兔 古 月 兔 古 月 兔

うちつけよたのむ懸去も月よき
破戒を清くくいかおふせ
ういふ遊よいつきも及ハ梅り
ちあまおろせの森せし
谷の戸を思はば松蔭もなう
ういし入院の大破いほさ
かいせき融しし向ふ志ある
葉しし明る水れうさる
兔 去 月 兔 去 月 兔 去

女房とやとふて糸を立おし
ちくちくしつひの一二ウタ子せん
むごまきと障子れおのちを
多くく落る懸洞の露
蝸牛れ角ふる内れをそき
ふとくろ紙よつかめいふ
ちのつきを扱しき花乃いつたも
糸ゆふ志んと御成志をく
兔 去 月 兔 去 月 兔 去

梁^リノ^リ巾^カかくさ^スき^ク深^クニ
出家^トげ^ルとい^ハ於^テ之^ノ川
き^ク幸^フ分^中意^を解^ス志^を一^ノ大
新^子か^ク一^ノ舟^の小^浦を
乃^レ之^の祿^をも^ウる^市
と^モ是^レを^ハ世^屋の^積火^をう^ルハ
た^リけ^テと^スと^モ喜^ミ川^胡胡^胡
書^文の^志を^一一^ノ人^を感^スる

兔 古 月 兔 古 月 兔

亡^骸ヲ^クふ^を名^流此^意も
麻^上下^此清^き一^原
待^人の^あら^とく^と陰^陽師
わ^いつ^くも^くは^くや^さの^園
臨^風此^表ハ^子賀^乃月^あは^や
う^月一^極を^と色^を一^也查
契^をく^送終^も家^の玉^かハ
ま^る小^西此^月ハ^終意^を

兔 古 月 兔 古 月 兔

夫中一の瓦控まひし枕を
 震動せし河冬此をや
 忘るも二里ハ御ぬ柄を
 りしより先も他人あり
 呼吸と申す河花のおおひ
 近江の餅うむうを敬
 充 古 月 充 古 月

才七

賤人何

次信と深解多河や君孫
 冬冬枯の深木を水く
 冬菊を牡丹に富み川く
 十徳あり河くひるたり
 見返りてあまると語り
 端幅ぬけ新橋にゆふ風
 充 古 月 充 古 月
 充 古 月 充 古 月

夏の秋に暮るる月乃並後
 足袋赤四足の付もさるめ次
 う 言の寄意しとわらうハ
 やし那ひ君を繕りし宗物
 松梅と末社此れも冬の春
 おもろぬ雨りし麦蒔きある
 只今の喜後後も中居り
 くれ淡うとく楯見をくる
 月 去 免 月 去 免 月 去

唐猫此鈴うらうらとよん機姫
 文庫吹さるる合沃老の秋
 ともと屋よ夕月結さうさり合
 柿沢掃てあさるるちほと
 いつしう無意の年若も売昔籠
 お者進くは油此ハッさち
 花の香と種火乃平と海と吹さい
 案く梢れ雛子免法り
 月 去 免 月 去 免 月 去

君舟も日永の肘を赤きれ
 弊人冬此目きいたのこ母
 弓白るまひいつる緒の年暮
 ようきささめぬあひれあき
 けむし月をそひひうねてん
 ぬひらりと神楽さうさ
 面や〜細も麻のそよく
 こちう月〜蛇乃藤衣
 月 太 免 月 太 免 月 太 免 月

やむ人の安堵よ茶打あ〜
 船つ〜侍るを言藤小起外
 正月と思そそる二月も
 二月もささくよを此月志
 顔の横〜垣のわひをき
 さ〜いてもよん刀なれと
 白波とむ〜ふよと立回越
 懶むろ〜と後家の思ひ藤
 月 太 免 月 太 免 月 太 免 月

之歎ハいつうさうりてや小盃
一切経此く里を法くさ次
松下風をげと思ひる水の音
草舟 蕨のうゝ家日あこり
不肖して市に隠る俳格子
履の仕合の沙汰り月を
むつそりとききぬ月が夏河系
そよ涼風志加茂にぬけく
右 兔 月 右 兔 月 右 兔

三
六位うゝ四位のをいふ程なう
なうゝ人もなうゝぬ書生
水はさうあゝ花は朝まゝ
白尾をさうゝ径あちうち
春もあゝ雪の腰にすち舟
家内出さうゝおぼろは比丘尼
梅干小日新はたゝぬ晴景
さうゝと玉乃鶴ハ籠り寐く
右 兔 月 右 兔 月 右 兔

中筆てはあいなしくと添あう
まゝの弁乃とる秩父口不枚
枝川の小名おぼく言出あ耐
降糸ともうううをうあ
初秋後秋とを何しやぬ膝枕
孝女うう糸の棧と那し
経よりくさうさいらさる奇綱
旁をううさる此古の御朱下
月 古 兔 月 古 兔 月 古

三
松苗もあふまうする存此秋
菌と植く川音待り
夜もぬ時を沙汰とも阿闍梨とも
於子と志うて廿四あまう
番箱の所は道いれ一落しあ
大豆とあをねを伸る守鏡に
まゝあひを獨らうくあひ出
丸粒とあひの列率此あう空
古 兔 月 古 兔 月 古 兔 月 古

川於る苑もうゝゝの昔うゝゝ
 うひちちと枝折立て夏こり
 門院のそととも見えぬ面や別
 このあふ啼きをれ臨あり
 投やりれ松よりこ海へ臨儀
 柳ここ中さう空のを船乃妹
 室川のせと手阿まこよ月文て
 嵐れ福くふ苑のうゝゝ飛來
 月 太 免 月 太 免 月 太 免

園越く下福をこよよ疲り
 ころり道かうゝゝすゝ福あや
 朝家よいつ道あやめれ切おゝ
 流ふま河神を不とけふこく
 後流のをを石女くむのまき
 水もさゝさ流者れ口さり
 鳴瀬や砥石の嶽志河こゝ
 多う月さささらん松み菅義
 月 太 免 月 太 免 月 太 免

袖をくまき君隠の蛛姑い
 さあぬうちうとあつ^美の夢
 供亦此折く波小なりそと
 人ともいそは臨痛をさうと
 浅月子表あひの繩をうとそ
 いつ身く居るそ櫃より本免
 津河は昔川秋の枯蒲菊
 津紙をうりよ遠返るあ川る

免 月 太 免 月 太 免

法うる皮翁子多形撰をうと
 丸く今月降舞くそ
 櫓の阿るうちハ忘る酒匂川
 肩うかへく楊志けあふ
 あうりぬも借くそ花の延轟武
 喜柳うとそ阿おや記乃こ流

免 月 太 免 月 太 免

賦何文

炳ひ福る下音ふくく君の門
 待と冬至此客と東渡
 若くと紫志くく居伸くくれく
 いつくもおたきく状乃文云
 跡先子橋垣の入帆さのみくふ
 朝寐せよと此二階くはち

夜兔
 葵太
 吐月
 兔
 兔
 月

神極くく跡この月乃ふる若子
 理分此後若蝶もむハく
 浮是子且如刃舞の相撲より
 りして付く侍煙草あさかひ
 白髪くく十年お此本音たくく
 寐相くくくり若まきくく口み人
 むせくくと茶権ふまくる不換令
 世況を憂て莊子志をくく

兔
 兔
 月
 兔
 兔
 月
 兔
 兔
 月

つるそとよ廊の見える窓かゝる
 極も柵とみみ出り申し
 女房茶よるほひ立る細徑
 小鳥と寄るくまふ草ちひ
 苔拾ふ子初の秋此こり
 車をとす還幸志存
 ちよとくそりふる名を
 若葉よりたうさ店乃喜好

月 兔 月 兔 月 兔 月 兔

目のうへに唇舌も紅て比良
 いつさそふてと老をい
 をこころぬ日灸の障子
 ありそ見え結納目録
 去令なく春袖の影此
 在路申しと膝子
 さむしるよ麦世の中乃村
 借て八余取此垣しそめ

月 兔 月 兔 月 兔 月 兔

顔出してをけと朝日十五日
 浦下一園基のふりさし木像
 盗人のきき忙持と秋の明て
 ちんころあれおを延引
 日おいつこ月もいつはこと隠匿
 船のこありを冬をさるるこ
 二
 疵瘡ハ家こあしぬおこて
 膝しこく唐ハ世界れさあく
 月 太 月 太 月 太 月 太

香衣着るふらさあそく雲衣
 吳見のふりり吳見仕うま
 十あれらもよかそうり切小判
 心交結されの牧もくく野
 冬の日と思そぬ蠅乃むき雲外
 妻を川舟をうらつてさるる
 月の皺ハ思えはうらく鏡研
 ふう風布干の社家れあのみ
 月 太 月 太 月 太 月 太

平丸

雷のふり川をり田のうらま
途出ちうふを侍の表れ有
川立くち水うらん急の較
離れ肉裏のうくうひをの
むらんや船いり此まある外
表明よりうと梅取も明り
妹うまははしく眉ハ折中を
兜のちと急小舟ひあふる

右 月 右 兔 月 右 兔 月 右

楯の急よかしく急取乃朝訓
帯よりうらまぬ急取そのま
徳状もあやあやよみ十浦を
素人く出るあやを産す
あをうらまぬ急取を
くけりうらまぬ急取を
沢すあをあや子孫れ急取
皮剥あやぬ急取あやまひ

右 兔 月 右 兔 月 右 兔 月 右

糸禪の月を寺へ銀法を
 風もふらぬり権のちりく
 誰うあひさりりそと秋は声
 志くこの碑を揚屋にす
 是とて側て被をくあふ動
 九十九草をつとそふも
 諸をんと思ひもよぬ大に虫
 字てを文交さう形鬼貫
 月 太 免 月 太 免 月

杓把飯の水を古糸と同ありを
 本契をこくくくく死七日法
 藤おろし拾ふく知ふ麻の角
 尾うちまよる女をくくく
 中垣ハ茨子顔へ乃そく世次
 織袴に里此をのれいく能
 飯森しそく虎をこはる風の月
 教珠の奇特を高程もまよ
 月 太 免 月 太 免 月

十 今又フー水室乃道て乳を

髪簾よりたきふ錫舟古窓

之後古阿漕くくあそぬ意

平より月つ〜運来とされく

け比れ多、朝あ〜夕時反

刃〜ハ細も沖波〜あそ

をり〜き岩屋の中れ就造

十露盤〜り〜少〜き禪門

免

古

月

免

古

月

免

古

初凡れ部切法〜古阿さ〜を

兼法〜陰乃烏毛投鞘

換の園のりやさ〜り〜又〜を

押〜り〜そ〜お〜お〜く〜

此夜語も文月舟のさ〜り〜を

臨屋飛〜く〜庭れ萩原

書入る質の阿を道も秋〜社

多川ももたは〜り〜白室の備

月

免

古

月

免

古

月

免

あり夏の物よ 嘉陽さるる物ハ
 石積く 灘をたぶとも
 頂此雲吹りけてふさ子山
 蕪志とあり 杉志供少道
 呵及子中もやとく 花心
 つあそこの海やよ 好も田つり
 兔 月 吉 兔 月 吉

才九

賦房何

傘の書物ととと何とて
 朋遠方より 梅れおく
 け門ハ古き工や 多てはらん
 同く事 の旅 一と海く
 おさあつこの見 馴ぬ葉子を被う
 下り 裾の喜れ 隆く 一と海
 吐月 夜兔 葵吉 月 兔 吉

出志海北出温泉も湧て月や川
いつまき秋を至る所のそれ
大文字の架造より穂花と
ころろぬ先乃肺守氣をふ
涉流北来かうもいふこり
兵ともぬちうもいふも
湯色北藤原折くてもあふ
命正ろひ乃身投つても
兔 月 太 兔 月 太 兔 月

白雲塔の神こもくく普門に
萍北八まりー岡原山莊
簾笑もまき吳魏蜀の月
こも川をまきあれも是基
うそまきさあふも小恙もて
世多くとける香の火加減
朝風の花ちうくと酔えを
依渡一系日れまもたまく
月 太 兔 月 太 兔 月 太 兔 月

二
香食と神みちをむるの古
訓了は供養に條核意愛
經表のまゝ燭臺ハ青なる
飯糰を見出まて目うとらりく
累くと蟹くまをのみ喰ちり
ぬちあげたるい海乃る船
江の清れ岩よ曇する所たより
積ハさゝり甲と先くまをさる
古 兔 月 古 兔 月 古 兔

二
凱陣よこまをるを抄ちり
さゝ木の伸る愛持世た水や
ふろくくまを親愛の石をさ
かちくあつてを塗所乃藤泊
昂くもころた又い有れ無
押あとのさ侍を河沿の舟
麻の喜ハ海ぬま乳乃山おち
たむ較奇屋の表を符てる
古 兔 月 古 兔 月 古 兔

一吐 嘯子此 詠をう ちる川
 多 ちま ち晴る 秋立 ちるし
 ち ちの 紀も 死たう 秋葉 鳳来寺
 山 葵れ ち何し 何と 恋せん
 暮 生ま 日ちや 恨く 桜をうめ
 半 切裂く ちけ ち 給合
 意う ちも ちか ち 濁れ ち 徳利
 ちく ちる ち 秋の 神多 ち ち 侍
 月 太 免 月 太 免 月 太

風 ち ち ち 園の 志く 川 ち ち ち ち
 月 見し ちの ち ち ち ち ち ち ち
 実 ち ち ち 魂も ち ち ち ち ち ち
 つ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 使 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 阿 比 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 光 陰 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 忌 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 月 太 免 月 太 免 月 太 免 月 太

眠る下り枕ふり川をりてねも
 杖はさ坂をこころと杖さう
 素名うくくそそねねさく売敷布
 きつ祿の返そ何もおほえに
 挽拵さまうと榎のようさうり
 山冬氷柱此二尺三寸
 保昌と乃ふをくまて獨武者
 うちさす水くと苗産東とる
 月 太 免 月 太 免 月 太 免

いさようひの蓋とる挽の音さうひ
 音うり唱むくは遠て鈍蛇
 菊の香よかき子奴律乃され衣
 おうくや海しとさ免たうく
 盛喰れ素麩四りて終まう
 今日あうりてうと糸宮
 心と箱を一う小纏めつとや
 臨しそくける病のいさりの
 月 太 免 月 太 免 月 太 免

年越のそもかきりりと吹かきり
 ともさぬちきるを神むさくふら
 いささ帯を解く月日をせしむる
 膏くちこめて海士に捨てるね
 依く木家の幕も時めく施縁鬼棚
 簾おろしこころに又きよひに
 手あふまよふ花の流たぬき
 聖くく志強れ懐紙水引
 古 兔 月 古 兔 月 古 兔

+

春の夜も憂き此の眠うら
 猶りうかへる業種何く
 粧さる柳の井ふくまきる浦
 ねあそひ志すく結る日はり
 人の目をよるよぬすむ意も志そ
 志くこのかきりれ自刺撫くハ
 呼次り本陣立の山うら
 懸れくみ躰濁ちりく
 古 兔 月 古 兔 月 古 兔

初むうー掃甲を指もそろふ之
 朽ゆー乃そく諺をそろの巢
 出毒とそろも出たそろの空
 あうか子山此 赤元春月
 朽ゆーるる居ままーふうす風
 津候子まーしきかけろふの将
 後子母念ふむなるお替粉刷毛
 交代おのちうに節屋く

月 吉 免 月 吉 免 月 吉 免

矢おようー那まんさくー通て
 泣くいーく梅此 沙守
 東風ー子母の候繰おろし
 ちみりーおろふ七十乃智恵
 於桂の苗末ちやーう花姑山
 三ッようみッそろふ 喜又

月 吉 免 月 吉 免

才十

賦何物

夏^ハ秋^ハ冬^ハ春^ハ何^レ物^{ナリ}と^シて^モハ^レハ^レト^クシ^テ

夏^ノ兔

之^ノ人^ノ言^ハハ^レク^ニハ^レト^クシ^テ

夏^ノ太

唯^ニ一^ノ鳥^ノ之^ノ志^ハハ^レク^ニハ^レト^クシ^テ

吐^ノ月

會^ハ有^リ此^ノ先^ノ追^ハ小^ノ毎^ニ也^{ナリ}

兔

夏^ノ氷^ハさ^らら^ら一^ノ枝^ヲ折^リて^シ

右

風^ト加^フ何^レも^ハ夕^ノ照^ル此^ノ時^ニ

月

若^シ可^ク也^ト茵^ヲ蔚^ラル^トハ^レト^クシ^テ

兔

^キう^キち^キ若^クキ^ク新^キ供^ハ此^ノ不^ノ積^ル始^メ

右

乃^ハカ^ハハ^レト^クシ^テ何^レ物^{ナリ}と^シて^モハ^レハ^レト^クシ^テ

月

あ^らあ^らや^とと^と母^ノ屬^ヲを^サせ^し依^ル

兔

膏^ノ菜^ノの^ナり^てを^セたる^{白^ハハ}ひ^テ

右

沙^ノ船^ト比^シる^ハ二^ノの^{名^ハハ}存^スと^シて^ハ

月

何^レや^ハ人^ノを^ハお^く海^ノを^ハと^りの^{語^ハ}

兔

地^ノ子^ヲゆ^りて^モ町^ノ乃^ハ是^レと^クシ^テ

右

文不転の登りし身又松よ声
聖根ありを此沼みりけり
を河うしのりきて鞘うし赤弱
親類まゝこれこそぬ焼香
脊中りむ細代扇風を引出
心とまらちたううの玉髪
月花も子れ貝松よおのひう
跡を今度とま乃折じ

月 太 兔 月 太 兔 月 太 兔

二

約鳥よ心後赤志くむ焼を消て
袖先よりぬるる之宅あしん
唱名ふつるあさ倍の言調子
此太刀とりけ氷心とふり
飛下りてかこよま総むまひ於
毎度近眼の不礼多しく
夜上うろ巻物なくく麻績
言尾々来るる時う川子く

月 太 兔 月 太 兔 月 太 兔

引汐の船も手曳れ石津さひ
六浦さびし紀本うきうき乃比
我も若ぬ緋屋使よ二夜まき
月代うちく練子志あてり
八木穂よ月の光も秋むらり
あまきも志く次贈れ草うき
絵川雲と苔楠ふりる星雲舞院
新藤人れ従者おし

右 兔 月 右 兔 月 右 兔 月 右 兔 月

賽の目も淑みあれまゝあて
かきく乃そこの瀬戸若丸壺
む祢くうぬの厚ちや此花の着
津波守つてよ舟の屋くそく
ともかくもあかさまかせ乃男入
我赤の意をきく阿弥陀佛
隈もなき一急お小月むらり
むうこれ縄のまきり穂蒔

右 兔 月 右 兔 月 右 兔 月 右 兔 月

そのいぢぬ歎法く此友あを
 在切来此非昔たましく
 改年の去籍も花乃をまをせ
 琉球古此より一草の芽
 うそをるとるも名利うそ出さ
 られもくくとあをぬ 襪
 懺法の去鼓鏡鉢組そるひ
 山言低下年古の穢念
 右 月 兔 右 月 兔 右 月 兔

子乙女めやとり道歩り管 襪
 口ささるれく侍人の去中
 名をうさくして今母天下茶屋
 精をく此施行心やす侍
 守いり一畢丸を同局布袋
 根系とをやまきくあり
 阿波踊のいとをうねくも押をれ
 まくくをひあふ七半此高
 右 月 兔 右 月 兔 右 月 兔

方丈も月を原とて藪野と
 境此海もいつの志とて病
 秋風の九本むかへき古手紙
 流觴う朋を結とて空とあり
 後思もまゝと福のそりまゝと
 来とてお福とて海とて母名此立
 筆此言一紙とてをよかんと
 聖高の砂をまゝとて床とて一と

月 太 兔 月 太 兔 月 太 兔

康彩を成経も皆汐とてり
 夏とて二日とて百四日
 細くと月も多月の飯名此ひ
 月け根情と此とてふとて弟
 輪毒の去うハ尻を去とて福も
 家鳴此瓦落も清くさ次
 園札の花法とて喜とてちとてり危
 借用中やもふ記乃い詠

月 太 兔 月 太 兔 月 太 兔

治華酒もまじりてはさうぬきを
 一此お徳も二のおもひ人
 洞窟の比翼ありしをぬみり
 船風さけと落まうすなり
 かゝ勝平退出待此冬本立
 何いち進ててこつこの堪悪
 撰りぬる眼も古とさう車借
 故事志り此奈良は法者
 免 月 吉 免 月 吉 免 月 吉

^{カサヒラ} 菌も年月はらふとくぬの
 あちり知ふも古るをうり
 押合さうてまきさむら帆ふ
 やうくさくさく之井の晩鐘
 舟の出も只日此色よむり
 百姓あそふ子稲乃ひき
 賭的此下も中は鴨もおとる
 安井あそぶをさう法て
 免 月 吉 免 月 吉 免 月 吉

細声丹心平紋の鳴あしひ
 去る一そそも階こみり
 荒歩此すこ切半果しあき
 子より外寅丹にそくたり
 花ふた枝爰任者の道し
 岸に柳ふてふみこ乃春草
 春 月 去 兔 月 去 兔

跋

といひいき茶物と良枝
 ひ住坐外心と茶はふた
 亦年ころに種は好小田
 御社あゆなをいして歩
 ともたかりくろ三吟千白
 満こしを納しそふく
 師中の道厚くしそ成る

願と探生窟をたれ引んとす
あまのたのむとせたる人河
神く 律上無降

糸花方叔免

安永五申伴時

京坂川錦上町

書林

西村市實也

江戸本町三丁目
西村源六

217 218

